

## DVD『人間は何を食べてきたか』（スタジオジブリ、2003）

近藤 昌夫

宮崎駿の世界をテーマにした卒論を読む機会があった。自分の言葉で、素直に感じたままを綴っていて、好感のもてる論文だった。卒業後はフレスコ画の勉強をするという。それならばと質問してみた――「懐かしい」という言葉をよく使っているが、宮崎アニメの「懐かしさ」って何だろう。

ジブリのアニメが大好きな彼にとって、それ以上の確な「批評言語」がほかに見つからないことはよくわかる。僕にも異論はない。例えば『となりのトトロ』だと、僕は五右衛門風呂に入ったことがあるし、畳で卓袱台の食卓を囲んだこともある。アニメを見るたびに思い出が蘇り、リアリティを感じる。けれども、体験のない板の間の雑巾掛けや、実際に見たこともない里山にまで動く感情は何だろう。これも「懐かしさ」なのだろうか。また、僕の「懐かしさ」と彼の「懐かしさ」は同じものなのだろうか。ふと確かめてみたくなったのである。

こういう無責任な質問は、徒に混乱を招き、大いに迷惑である。案の定、彼は黙ってしまい、質問した僕までが「うーん」となる始末だった。緊迫した口頭試問がさらに緊迫度を増したので、「難問」に格上げされて今後の課題となった。「たぶん、ジブリのアニメには、記憶と体験を繋ぐだけでなく、曖昧な部分まで補完する経験と技術が詰まっているのだろう云々……」

闇に葬られたのである。

ところがその後、「難問」が深刻さを増し

て息を吹き返した。きっかけがこの資料である。

DVD『人間は何を食べてきたか』（全8巻）はNHKで放送されたドキュメンタリー。番組に感銘を受けた高畑勲・宮崎駿両監督の強い意向で「ジブリ学術ライブラリー」に収められた。人間は何をどのように食べてきたのかを、食材の原点から探るこの番組は、食べ物と人間の関係をテーマにして、肉、米、麵、醤油、雑穀など、人類を支えてきた18種類の食物を、固有の文化と生活とともに紹介している。例えば豚の解体と加工から見えてくる食と人間の関係は、自然と人間の共生、あるいは厳しい風土を生き延びるための人間の知恵と生命力である。それは『天空の城ラピュタ』や『もののけ姫』などにも共通するテーマだが、曖昧な「懐かしさ」がみじんもない。手法が違えば簡単に片づけられることではない。限りなく物語に近いドキュメンタリーもあれば、シュルレアリスムなアニメだってある。興味深いのは、ジブリの「懐かしい」作品たちと、それらの重要な「糧」のはずであるこのDVDとが、どこで出会っているのか、ということだ。そこで日々の食卓を眺めてみる。

毎日の家庭の食事は、和洋中の境界はもとより、おやつと食事のケジメすら崩れつつある。「由々しき事態である。早急に対策を講じるべきである。」けれども食物の歴史は変化の歴史だし、カロリーという数値に置き換えれば取り合わせに常識は通用しなくなる。

栄養バランスといわれても、カルシウムならば「ようし」と指をさし、視認できるかもしれないが、さてビタミンはとなると、俄に心許なくなる。こうした屁理屈も多分、多忙多様な脳化社会の食物流通に拍車をかけるのだろう。昨今の「脳食物」の特徴は、原材料ばかりか「懐かしさ」も添加していることである。例えばP・メンツェル/D・フェイス『地球の食卓』(TOTO出版)を手にとってみよう。世界各国の家庭を訪れ、一週間分の食事をすべて並べて一枚の写真に収めた『地球の食卓』は、生活習慣と人生の価値観がまる見えの食卓に、文化の今を見る試みである。ファーストフードなどの「脳食物」とともに、固

有の伝統食がずらりと並ぶ食卓の集合写真を見れば、食物供給のグローバリゼーションとは、栄養価の低い加工食品の蔓延と健康志向の高まりであることが一目瞭然である。われわれの食卓の現実は、すでに不条理劇の舞台を跳び出してアニメに「進化」しているのである。

「食べる」シーンを音と動きで構成してリアリティを創ろうとする宮崎アニメは、食べることが生きるための基本的な仕事だった「懐かしい」時代のリアリティと、どのように距離をとってきたのだろう。うまそうに食べるシーンにそのこたえがあるのかもしれない。